

# トビウオ通信 (H27 第2号)

http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/ (TEL 0855-22-1720)

## 《平成26年(2014年)の島根県漁業の動向》

県の漁獲統計システムにより集計した県下漁業協同組合の漁獲統計資料(属人)などから、平成26年(1~12月)の島根県漁業の動向を取りまとめました(海面漁業・漁船漁業のみ)。

### 全体 … 漁獲量は前年を下回ったものの、生産額は前年より増加し平年並み

平成26年の島根県(属人)の総漁獲量は11万7千トン(平年比88%)、総生産額は194億円(平年比102%)でした(表1、図1、2)。前年(平成25年)と比べると、総漁獲量で2万3千トンの減少、総生産額では5億1千万円の増加となりました。漁獲量の減少は、主にまき網漁業によるマイワシやウルメイワシの減少が大きな要因となっています。また、生産額の増加は、イワシ類の減少分をマアジ、ブリ、サバ類の増加分が上回った事によります。

漁業種類別でみると、漁業生産額ベースでまき網が全体の47%を占め、沖合底びき網2そう曳きと定置網がそれぞれ全体の10%、小型底びき網1種が全体の9%となりました。(各漁業の動向については後述します)。

魚種別でみると(図3)、漁獲量の上位5魚種はマアジ(4万2千トン)、ブリ(2万トン)、サバ類(2万トン)、カタクチイワシ(1万1千トン)、ベニズワイガニ(5千トン)となりました。これらのうちマアジ(漁獲量の平年比124%)、ブリ(同176%)は平年を上回りましたが、サバ類(同107%)、カタクチイワシ(同82%)は平年並み、ベニズワイガニ(同76%)は平年を下回りました。

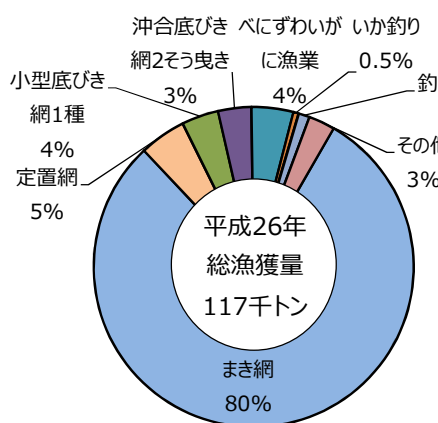


図1 平成26年の島根県の総漁獲量の漁業種類別内訳

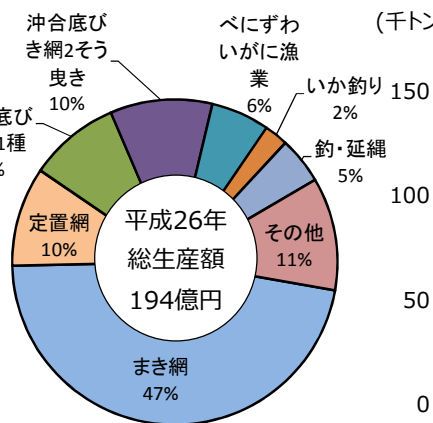


図2 平成26年の島根県の総生産額の漁業種類別内訳

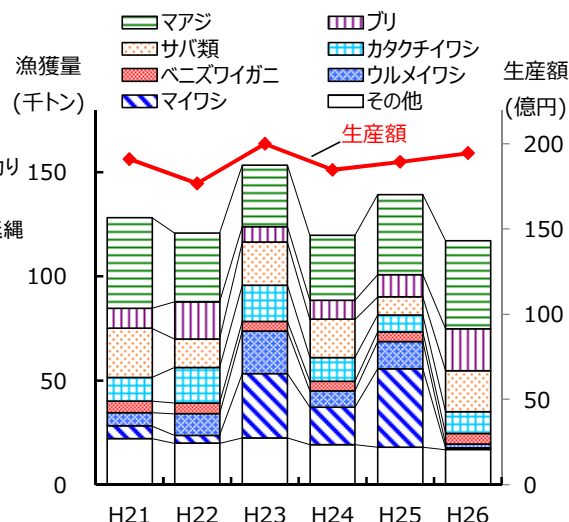


図3 島根県の総漁獲量・金額の推移

#### ＜文中の語句説明＞

- ☞ 平成26年の漁獲量・生産額は県下全地区、全経営体を対象に集計していますが、平年比は一部経営体(実質的に県外を根拠にしているまき網船団と沖合底びき網漁船)を除いた数値で比較しています。
- ☞ 「前年」は平成25年の数値、「平年」は過去5年(平成21年~25年)、沖合底びき網漁業のみ過去10年(平成16年~25年)の平均値を指します。
- ☞ 平年との比較は、平年比120%以上は「平年を上回る」、平年比80~120%は「平年並み」、平年比80%以下は「平年を下回る」としています。

## まき網漁業 … 中型まき網 1 船団あたりの漁獲量は平年並だが、生産額は平年を上回る

本県の基幹漁業の一つである「まき網漁業」には中型まき網や大中型まき網などがあります。これらは主にマアジ、サバ類、イワシ類などの浮魚（うきうお）を漁獲対象としています。

まき網漁業全体の平成 26 年の漁獲量は 9 万 3 千トンで島根県全体の漁獲量の 8 割を占め、生産額でも 91 億 2 千万円で県全体の 5 割を占めました。まき網漁業のうち大半を占める中型まき網の漁獲量は 8 万 2 千トン（平年比 93%）、生産額は 76 億 3 千万円（同 133%）でした（図 4）。1 船団あたりの漁獲量は平年並（同 90%）でしたが、生産額は平年を上回りました（同 128%）でした。

中型まき網を対象に魚種別でみると、近年主力のマアジは春漁は平年並みでしたが、秋漁が平年を上回り漁獲量は 3 万 8 千トン（平年比 137%）でした。サバ類は 2～3 月に豊漁だったため、漁獲量は 1 万 6 千トン（同 120%）で平年を上回る漁況でした。カタクチイワシは 1 万トン（同 89%）と平年並みの漁獲量でした。近年資源の増加が期待されるマイワシについては、平成 26 年は 4～5 月にわずかに漁獲されただけで、漁獲量は千トン未満（平年の 5%）でした。ウルメイワシも平成 26 年はまとまった漁獲がなく、漁獲量は 2 千トン（同 18%）に留まりました。

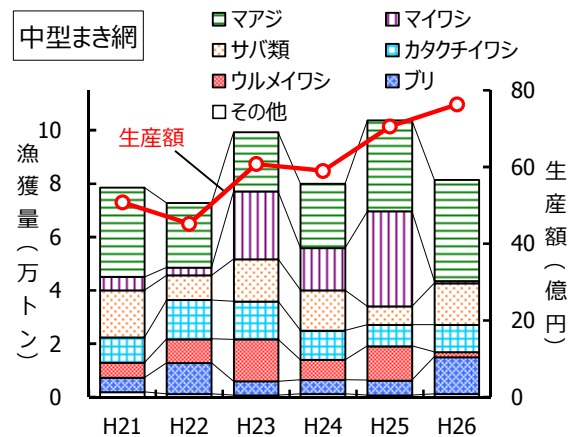


図 4 中型まき網による魚種別漁獲量および生産額の推移

## 沖合底びき網漁業(2そう曳き) … 1 船団あたりの漁獲量・生産額はともに平年並み

沖合底びき網漁業（2 そう曳き）は 2 隻の漁船で網を曳き、カレイ類、アンコウ、アカムツ（地方名ノドグロ）など海底付近に生息する魚介類を漁獲対象としています。平成 26 年の漁獲量は 3 千 9 百トン（平年比 77%）、生産額は 19 億 7 千万円（同 85%）でした（図 5）。本漁業の船団数は集計対象期間である平成 15 年以降で 11 船団から 7 船団に減りました。1 船団あたりでみると、漁獲量は 551 トン（平年比 92%）、生産額は 2 億 9 千万円（同 102%）でともに平年並みでした。長期的な動向をみると、1 船団あたりの量・金額はほぼ横ばい傾向にあるといえます（図 6）。

魚種別の動向では、キダイ（平年比 150%）、マトウダイ（同 169%）は平年を上回り、アカムツ（同 109%）、ソウハチ（同 110%）は平年並みでした。一方、ムシガレイ（同 62%）、アンコウ（63%）、アカガレイ（同 64%）、アナゴ・ハモ類（同 64%）、スルメイカ（同 69%）、ケンサキイカ（同 51%）は平年を下回りました。

### 沖合底びき網（2そう曳き）

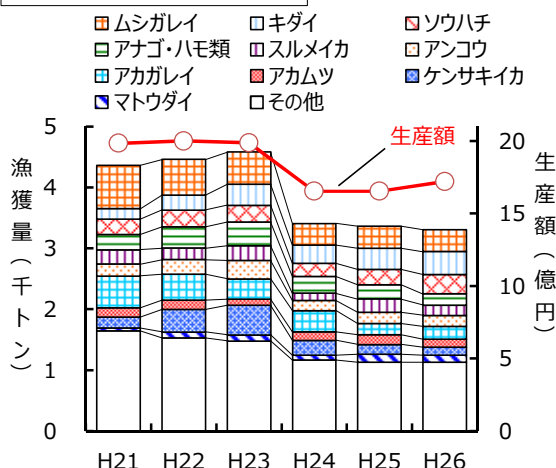


図 5 沖合底びき網漁業（2 そう曳き）による魚種別漁獲量および生産額の推移（一部経営体を除く）

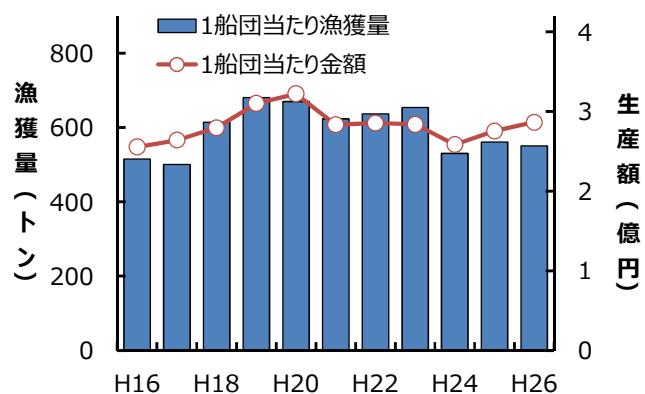


図 6 沖合底びき網（2 そう曳き）1 船団あたりの漁獲量・生産額の推移

## 小型底びき網漁業 1種 …… 1隻あたりの漁獲量・生産額ともに平年並み

小型底びき網漁業1種は、1隻の漁船で「かけまわし」と呼ばれる漁法で操業し、カレイ類、ニギス、タイ類など海底付近に生息する魚介類を漁獲対象とします。平成26年の漁獲量は4千4百トン（平年比79%）で、生産額は17億6千万円（平年比88%）でした（図7）。本漁業の操業隻数は廃業や減船により減少傾向にあり、平成18年以降で57隻から45隻まで減りました。1隻あたりで見ると漁獲量は97トン（平年比91%）で、生産額は3千9百万円（同101%）で、ともに平年並みとなりました。

魚種別の動向では、アカガレイ（同137%）、マダラ（同130%）が平年を上回り、ヒレグロ（同106%）、アナゴ・ハモ類（同93%）は平年並みでした。一方、ソウハチ（同77%）、ムシガレイ（同64%）、キダイ（同67%）、アンコウ（同76%）、ニギス（同66%）は平年をやや下回りました。

また、アカムツは平年の48%の漁獲に留まり、ケンサキイカは平年の18%しか漁獲されませんでした。

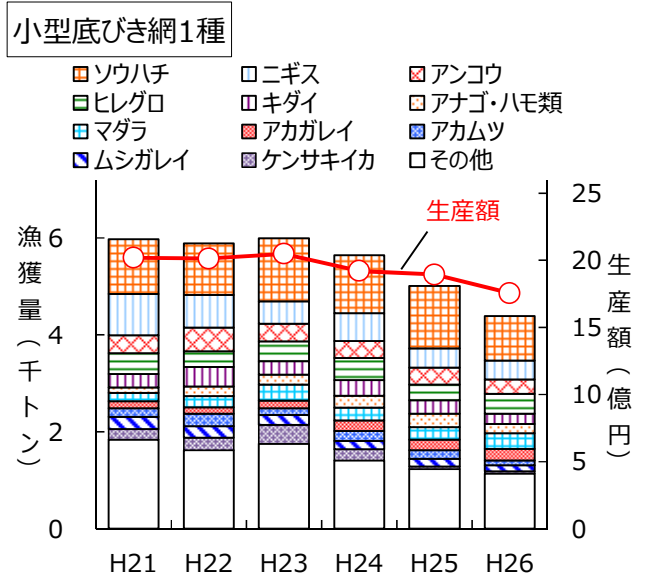


図7 小型底びき網漁業1種による魚種別漁獲量および生産額の推移

## 定置網漁業 …… 漁獲量・生産額ともに平年並み

定置網漁業（大型定置網・小型定置網・底建網）は魚類の通り道に網を張り、網に入り込んだものを漁獲する漁法で、マアジ、ブリ、サワラ類、イカ類などが漁獲対象となります。平成26年の漁獲量は5千5百トン（平年比93%）、生産額は19億円（同93%）で、ともに平年並みでした（図8）。また、定置網漁業の全漁獲量の約8割を占める大型定置網の1ヶ所あたりの漁獲量（同93%）、生産額（同93%）についても共に平年並みでした。

地区別の漁獲動向をみると、出雲地区では主力のブリ（平年比103%）は平年並み、サワラ類（同144%）は平年を上回りましたが、マアジ（同77%）が平年を下回ったため、総漁獲量は平年並み（同94%）となりました。

石見地区ではブリ（同125%）、サワラ類（同201%）は平年を上回りましたが、主力のマアジが平年の53%と少なかったため総漁獲量は平年並みとなりました（同81%）。

隠岐地区では主力のマアジ（同139%）は好調でしたが、ブリ（同87%）、スルメイカ（同101%）がいずれも平年並みであったため、総漁獲量は平年並み（同103%）でした。

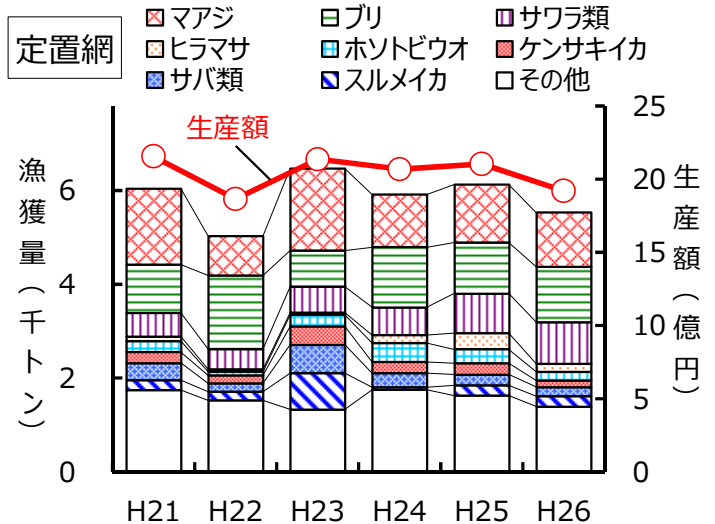


図8 定置網漁業による魚種別漁獲量および生産額の推移

## 釣り・延縄 …… 漁獲量・生産額ともに平年並み

釣り・延縄の平成26年の漁獲量・生産額はそれぞれ1千3百トン（平年比87%）、9億1千万円（同84%）で共に平年並みでした（図9）。平成26年の漁獲量は前年を上回りましたが（前年比108%）、単価の高いクロマグロ（ヨコワ）が前年より大幅に減少したため、生産額は前年を下回りました（前年比94%）。長期的な傾向をみると、本漁業は漁獲量・生産額ともに漸減傾向にあります。

地区別の漁獲動向をみると、出雲地区ではサワラ類（同160%）とヒラマサ（同261%）は平年を上回りましたが、漁獲量の約半分を占めるブリ（平年比86%）は平年並だったため、総漁獲量（同93%）は平年並みとなりました。

石見地区でもブリ（平年比86%）は平年並で、サワラ類（同131%）とヒラマサ（同134%）は平年を上回りましたが、メダイ（同15%）やクロマグロ（同2%）は不漁で、総漁獲量（同75%）は平年を下回りました。

隠岐地区ではブリ（平年比244%）、ヒラマサ（同292%）が豊漁でした。カサゴ・メバル類（同97%）、メダイ（同82%）、キダイ（同85%）は平年並みでしたが、石見地区と同様クロマグロ（同21%）とメダイ（同15%）は平年を下回り、総漁獲量は平年並み（同96%）でした。

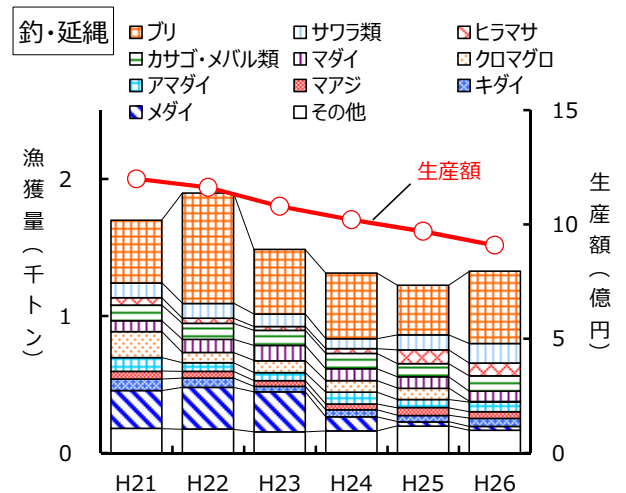


図9 釣り・延縄による魚種別漁獲量および生産額の推移

## イカ釣り …… ケンサキイカは不調、スルメイカは平年並み

イカ釣り漁業は名前の示すとおりスルメイカやケンサキイカなどのイカ類が漁獲対象で、本県では夜に集魚灯（漁火）によりイカを集める夜釣りが主流です。また、漁船の総トン数により「イカ釣り5トン未満」「小型イカ釣り（5トン以上30トン未満）」「中型イカ釣り（30トン以上185トン未満）」に区別されます。

平成26年の漁獲量は6百トン（平年比46%）、生産額は4億6千万円（同56%）で平年を大きく下回りました（図10）。漁獲量減少の主な要因はケンサキイカの漁獲量が290トン（平年比31%）と少なかったためです。ケンサキイカについては平成26年は秋季来遊群が少なく、8～11月にまとまった漁獲がありませんでした。スルメイカについては平成26年の漁獲量は310トン（平年比81%）と平成21年以降としては平年並でした。スルメイカは1～2月の漁獲は少なかったものの12月に平年を上回る漁獲がありました。また、ヤリイカは2月頃の来遊が極めて少なく、漁獲量は5トン（平年比22%）と不振でした。長期的に見ると、スルメイカは平成20年以降低水準の漁獲が続いており、またケンサキイカの漁獲も減少しているため、本漁業の漁獲量、生産額は減少傾向にあります。

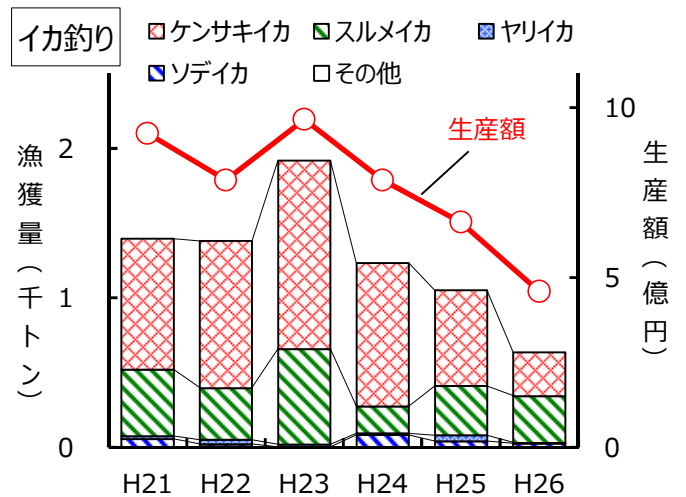


図10 イカ釣りによる魚種別漁獲量および生産額の推移

※ 各漁業の概要やトビウオ通信バックナンバーについては島根県水産技術センターのホームページをご覧ください。（<http://www2.pref.shimane.lg.jp/suigi/>）



表1 平成26年の県内主要漁業の海区別漁獲量・生産額

漁業種類	海区	漁獲量※			生産金額※			1ヶ統あたり漁獲量※			1ヶ統あたり生産金額※		
		量(トン)	平年比	前年比	金額(百万円)	平年比	前年比	量(トン)	平年比	漁模様	金額(百万円)	平年比	漁模様
すべての漁船漁業	全県	117,078	88%	84%	19,446	102%	103%	—	—	—	—	—	—
中型まき網	石見	5,148	96%	149%	1,052	134%	147%	1,724	103%	○	318	138%	◎
	隠岐	76,483	93%	76%	6,577	133%	104%	8,498	86%	○	731	123%	◎
小型底びき網1種	石見	4,113	83%	91%	1,641	93%	96%	98	91%	○	39	102%	○
沖合底びき網2そう曳き	出雲・石見	3,942	77%	95%	1,972	85%	101%	551	92%	○	287	102%	○
定置網 ※※	出雲	3,429	94%	89%	1,303	93%	91%	286	94%	○	109	93%	○
	石見	789	81%	84%	243	83%	87%	197	81%	○	61	83%	○
	隠岐	1,308	103%	98%	373	99%	95%	436	103%	○	124	99%	○
釣り・延縄	出雲	589	83%	93%	381	85%	92%	—	—	—	—	—	—
	石見	378	66%	85%	289	70%	77%	—	—	—	—	—	—
	隠岐	257	83%	109%	300	105%	129%	—	—	—	—	—	—
イカ釣り	出雲	302	44%	65%	237	57%	76%	—	—	—	—	—	—
	石見	126	44%	65%	121	61%	81%	—	—	—	—	—	—
	隠岐	207	49%	53%	101	47%	51%	—	—	—	—	—	—

※ 漁獲量・生産額は県内全漁協・全経営体が対象。平年比は実質的に県外を根拠にしている一部の経営体を除いた漁業協同組合 JF しまねおよび海士町漁協の数値を元に算出。

平年比：過去5年(H21～H25年)の平均値との比較、沖合底びき網2そう曳きのみ過去10年(H16～25年) 漁模様：◎が平年以上、○が平年並み、▲が平年以下

※※定置網の1ヶ統あたり漁獲量・生産金額は集計対象期間(H21～H26年)に操業実績のある大型定置網のみを対象に算出。